

お墓の後継ぎ どうしよう？

ここ数年のお客様からよく聞く悩みです。

後継ぎがない。子供が東京にいます。娘しかいない。息子が同居しているがまだ結婚していないなど。ひと昔前はこのような悩みは少なく、皆さん迷わずお墓を建てたものです。時代が移り、都会と田舎の違いが広がり、新しい世代の意識が変化してきました。

最近では永代供養や樹木葬、また行政で作る遺骨収納施設の合葬墓もあります。選択肢が増えたのですが迷うことも増えてきました。

お墓ってなんのために建てるのでしょ。

まず浮かぶのは、亡くなった方の遺骨を納める場所。大

切な方が亡くなり、葬儀がすんで、さて遺骨をどうしよう。一番多いのが昔からのお墓に納めること。

お墓でも永代供養でも樹木葬でも、当然残った方々がお参りします。これって、何故でしょう。子供の頃からやっているのだから自然だと思える人、愛しい故人を偲んで絆を実感する人、先祖様や供養について強い信条で臨む人、お墓なんかなくてもいいかなと感じる人など様々です。

本人の希望を尊重する考え方があります。自然に帰りたいという故人の希望で山や海へ散骨。ところがその後、家族や親戚そして子供達からお参りしたいと言われることがあります。その時に「何も無い！ウワー、寂しい」と感じてしまいま

す。そこで最近では、散骨する際に遺骨の一部は残すことが多いようです。ということは、やはり故人とのつながりが何にもなくなることで不安なのです。

お墓は、故人とのつながりを見直すのはもちろんですが、本当に大事なことは、これからのこと、今生きている人の未来に明るい希望を灯すことです。そのための方法はご家庭によって様々な方法があります。

どうぞお気軽にご相談ください。多くの事例がありますのでお役に立てると思います。

お墓参りできるしあわせ

父が眠るお墓をお参りして、10年前と今では、手を合わせる時の思いが変

わってきたと、今更ながら感じます。中学ころまでの私にとって、父は頑固で怖くて側に居たくない存在でした。それでも高校くらいからは、「なるほど。他の人とちよつと変わっているけれどなかなかおもしろいな」と思える父になっていきました。そんな父が68歳で亡くなって今年で18年、17回忌も過ぎました。



そして、三内霊園をはじめとして、たくさんのお墓も、お客様ひとりひとりにとって、大切なお家と家族の歴史を刻んでいます。お墓参りの心境が20代の自分と今の60代の自分では、随分変わってきました。お墓は少し古びてきましたが、相変わらずじつと建っています。そこにお墓の価値があるようです。

夫婦、親子、兄弟、嫁姑、いろんな人間関係の糸のつながりが、今の自分を作ってくれているのだなど、ありがたく思えてきます。

「地域の文化を

大切に

心の豊かな

ふるさとづくり

に貢献します」

ちよつと背伸びしているかもしれないですが、いつも仕事に対して考えていることです。

私も還暦を過ぎ、父の行年まであと6年。「ウーム。親父はこの歳にはこんなことをやっていたのか。それにひきかえ今の自分は…」と、自分の未熟さを悟られます。想いは石に刻んで長く残ります。後の人に、どんな想いを伝えたいのかを大切にしていきたいと考えています。

これからもどうぞお引き立てのほどをお願いいたします。

代表取締役 番地 常夫